



前書き

この作品は『ホラー小説大賞・短編部門』に投稿し、一次選考にも入らなかった(笑)作品です。

とりあえず一時的に載せてみることにしました。(選考漏れしているので、載せるのに問題はないはずです・・・泣)

これから小説を投稿しようと考えている方がもし、この作品をご覧になることがありましたら、どうかダメな点を見てこれはいかんわ～と考えて、ご自分の作品に活かしていただければ幸いですv

ブログに載せるにあたって、改行を増やしてPCから読みやすいように変更しました。文字サイズも大きめにしてみました。

原文とはちょっと違います。そのままだとかなり見づらいので・・・。

こんな風を書いたらダメだよ的投稿作品ですが、藤森の頑張りが多少なりとも含まれていますので、最後まで目を通して頂ければ嬉しいです！！

それでは、拙い作品ですがどうぞ！

藤森 凜 拝

刀が一閃して、血しぶきが辺り一面に舞った。

腹を庇った姿勢のまま、伊織は、どうっと庭に倒れこんだ。悲鳴を上げることすら出来ないほどに右腕が熱く痛む。庭に落ちた衝撃でさらに血が溢れ出た。

白い着物に、柄のような赤い染みが次々と浮き出てくる。

何が起こったのか伊織はすぐに理解出来なかった。あんなに自分に愛情を注いでくれた主が、自分を切りつけるなど伊織には考えられなかった。

しかし、現実には充血した瞳を異様にぎらつかせ、赤く濡れた刀を構えた主が倒れている自分を目指し、にじり寄ってくる。右腕からは大量の血が溢れ、主に斬りつけられたことが現実であることを示していた。

伊織は最後の力を振り絞って地面を這いずり進んだ。半信半疑の心ではあったが、もし本当に主が自分を殺そうとしているなら、赤子まで死んでしまう。

やっとの思いで授かった主との大切な赤子を失うなど耐えられない。器量の冴えない自分を初めて、おなごとして扱ってくれた愛しい主。

生まれて初めて愛した男の子どもを身ごもることの幸せを、伊織は腹を撫でては感じていたのだ。当然、主も腹の子を喜んでくれると伊織は信じて疑わなかった。

だから今夜、酌をしながらそっと「子を授かりました」と囁いた瞬間、主が伊織の腹を蹴り飛ばしても尚、何かの間違いだと思った。

この世にただ一人の女だと甘い声を出しながら、聞へと誘う主の姿が脳裏をかすめる。

「お前のような卑しい身分の子なぞいらぬわ！」

優しかった主の顔が、酒と興奮しているせいで真っ赤になり醜く歪んでいる。

毎夜毎夜、優しい声音で自分の名を呼んでくれた主の顔とは、まるで似ても似つかない。

悲しみと絶望が伊織の身に押し掛かるようにして襲ってくる。腹に宿る赤子を守りたいという思いだけが、主から逃げる気力になっていた。

伊織は、遂に松の下まで追い詰められた。刀は伊織の血でぬらぬらと光り、主は鬼のような形相で血まみれの伊織を見下ろしている。

主が本気で私を殺そうと思っているはずがない、伊織は右腕の痛みを激しく感じながらも殺意を否定した。

愛しい女だと、可愛い女だと、囁いてくれた主が自分を憎いと思うはずがない。

「主や、主。私の腹にはあなた様の子が」

「貴様は田舎暮らしの退屈を紛らわすだけの女だ！俺につきまとうでない！」

左腕を突き出して主に呼びかけたが、刀が鋭く唸り伊織の腹を突き刺した。この世の者とは思えないひび割れた悲鳴を伊織は上げた。

自分の命よりも大切にしてきた腹の赤子が死んでしまう！

「私の、私の赤子が！私の私の」

叫び続ける伊織の頭を目掛けて刀が振り下ろされた。

窮屈な軽自動車から降りると、滋野正史は思いっきり体を伸ばして体の強張りをほぐした。

「田舎は空気が上手いな」

年甲斐もなく声を上げると、背後からツネの笑う声がした。

「はしゃいでいるなあ、マサ」

「そりゃあ、はしゃぐさ。しばらくはうるさい家族から解放されるんだからな」

トランクから荷物を運び出しているヨシが不安そうな眼で滋野を見た。家庭の事情を話したから、自分を心配してくれているようだ。声に出して言う事が出来ないのが、気弱なヨシらしい。

「さあ、我が大田不動産が誇る幽霊屋敷へようこそ！先代から誰も借りたことのない筋金入りだよ」

運転席から降り立った大田がふざけた調子で、家を紹介する。

「中年男が恐がる台詞じゃないな。女房が家の中で待ち受けているっていうなら怖いけどよ」

軽口を叩きながら、ツネもヨシを手伝って荷物を運び込む。

じっくりと家屋を見つめながら、滋野は遠く離れた場所に居る家族のことを考えた。

そもそも、今回こうして学生時代からの仲間が合宿気分で集まることになったのは滋野がきっかけを作ったのである。

警察官として一生を費やした滋野にとって、許されない事態が家庭内で起こった。寝耳に水、青天の霹靂だった。

娘の登紀子が、悪い男に騙されて妊娠してしまったのだ。仕事で忙しい滋野は娘の変化にまるで気がつかず、妻と娘が揃って告白した時に、初めて娘の腹の膨らみを知った有様だった。

社会人一年生の登紀子は同僚に誘われて繁華街へ遊びに行き、そこで出会った男とあっさり交際を始め、金を筆り取られるだけ筆り取られて捨てられた。

世間知らずの登紀子は疑う考えさえ持たず、男から胡散臭い話を聞かされるたびに頭から信じて金を渡していた。男からしてみれば、さぞかし騙しやすい女だっただろう。

登紀子が妊娠したと知ると、男はあっさり消えてしまい、連絡を取ることは二度と出来なかった。

涙ながらの告白を聞いた滋野は激怒した。警察官の娘ともあろう者が、軽薄な男にほいほいとついていき、騙されて妊娠するとは何事か！

涙を流す娘の頬を叩き、妻を監督不届きだと怒鳴りつけた。絶対に子どもは産むな、と言い放った時に部屋の空気が

変わった。

泣いてただけで口答えしなかった妻と娘が、瞳に怒りを滾らせて怒鳴り返してきたのである。

家庭を顧みなかった人に子どもを奪われるのは嫌だ、自分は絶対に子どもを見捨てたりしない。激しい娘の言葉に滋野は完全に度肝を抜かれた。

初めて娘に反抗された滋野は不様にも直ぐに言葉を返すことが出来ず、顔を真っ赤にして「勝手にしろ！」と吐き捨てた。妻が自分と娘を取り成そうともしなかったのも癪に障った。

怒りが収まらなかった滋野は古い友人の大田に相談し、しばらく家を離れることにした。

幸いなことに大田は不動産屋を経営しており、空き家を三日間なら提供できると気前のいい提案をしてくれた。

どうせなら学生時代の仲間で集まって騒ごうじゃないか、ということになり、四人のメンバーが集まった。

皆、仕事がある身だが有給を取って骨休みすることにしようだった。

滋野は警察に勤めてから初めて、私的な理由で休暇を取った。

高校を卒業するときから警察に入ることを決めていた滋野は、採用試験を一回で受かり、そのあとの人生は全て仕事に費やしてきた。

捜査第一課で叩き上げの刑事として働き、どんな事件でも靴底がすり減るほどに歩き回り、時には犯人に足を撃たれたりしたこともあったが、滋野は絶対にへこたれなかった。

対象が困難であればあるほど、滋野の闘志は高まった。そんな一直線の情熱が実を結んだのか、警視にまで出世した。

仕事は順風満帆だったのに、まさか家庭でつまづくことになるとはいくら勤の鋭いベテラン刑事でも想像だにしなかったのである。

大田が幽霊屋敷と称した家屋は平屋で古くはあったが、居心地は悪くなさそうだった。

日光を受けて黒い瓦が光り、家の周囲は茶色い土塀で囲まれている。

大きな面積の庭があったが、松が一本あるだけで何とも寂しい印象を与えた。庭の面積が勿体ない、と家主でもないが滋野は考え、自分が住んだら庭を日本庭園にする、とぼんやりと夢想した。

屋敷の周辺は見渡す限り、田園風景で都会のごみごみした街並みを見慣れている滋野の瞳を癒してくれた。

不便なところかもしれないが、老後に隠居して住むにはいい場所かもしれない。漠然と滋野は自分の老後考えたが、まだ老け込むものかと己を叱責して屋敷の方を振り返った。

屋敷の中は広々とした造りで、柱が長い年月を感じさせる色合いに変化している。

玄関を上がってすぐに長い廊下が一直線に伸びており、障子が左右にある。障子の紙は黄色く変色していた。

意外なことに畳はさほど傷んでおらず、乾拭き程度の掃除ですぐに使えるようになりそうだった。

障子を大きく開け放つと、湿った土の香りが滋野の鼻腔をくすぐる。

「田んぼが近くにあるんだな。懐かしい匂いがする」

ふるさとの景色を思い出していると、ツネが冷やかした。

「あんまり思い出に耽っていると、早く老け込むぞ。メタボ腹とかになってな」

五十になっても立派な体格をしているツネはにやにや笑って滋野の腹を軽く叩く。

「私は大丈夫だ。まだまだ腹は出てないぞ」

ヨシは髪を押さえながら

「ぼくは最近、こっちの方がまずくてね。妻に諦めが肝心だって言われたよ」

「そういや、僕も娘に髪のことを言われたなあ。白髪が増えたってさ」

枝毛を探す女の子のように、大田が髪をいじる。

「学生時代のように若くはないよ。私たちはもう五十代なんだから」

旧友たちが不安そうな顔をして髪をいじる仕草に滋野は笑った。

(そうか、私たちもお互いの老いを感じる年齢になったのか)

新鮮な驚きと、不思議な嬉しさがある。同じ様に年を取っていく友がいることへのありがたさだろうか。

仕事一筋で生きてきた滋野は、今、少しだけ自分が足を止めて過去を振り返ろうとしていると感じた。

そうだ、偶にはいいかもしれない。私だけの時間があっても。職場や家庭で演じている顔を、この三日間だけは忘れることにしよう。

そう考えると、滋野の胸はすっと軽くなった。

屋敷の中で一番広い部屋に座布団を敷き、各自が持ち寄った酒とつまみを置くと、それなりに豪華な酒席になった。

「さあ、今夜はいくら酔いつぶれても問題ないから飲んで、飲んで飲み倒さないと損だぞ！」

四人の中で一番体格の良いツネがビールの入ったコップを高らかに上げ、他の三人も合わせてコップを上げる。

「さて、何に乾杯する？」

丸い顔に丸い眼鏡をした温和な性格の大田が、にこにこ周囲を見回す。

「健康祈願とか？」

小声でそっと呟いてヨシは視線から逃げるように俯く。気弱なことが顔と髪に表れてしまっている男だ。

「無病息災・念願成就、私は何でもいいよ。酒が飲めるならね」

学生時代の気安さを思い出しながら、滋野はコップをぶつけた。合図のように、皆が一斉にコップを鳴らし、勢いよくビールを飲み干した。

「ああ、この上手さはガキのときは分からなかったな。中年になっていいこともあるもんだ」

味が分かるおかげで太鼓腹にはなったけどな、と豪快に笑いながらツネは腹を撫でる。

小中高と柔道部に所属していたツネの腹は、学生時代を終えて何十年も経つ現在でも腹筋で割れている。滋野は空手部に所属し、体を鍛えてはいたが、ツネほど迫力のある男にはなれなかった。

今もツネに一種の迫力があるのは、身長も関係しているに違いない。大男と呼ぶに相応しい堂々たる体躯を五十代になってもツネは維持していた。

加納 常昌ことツネは、現在警備会社に勤務しており、順調に出世しているそうだ。学生時代は短気で手が早く、喧嘩

ばかりしていた。

教師に怒られることが日課だった男がよく出世できたものだと、報せを聞いた滋野は首を捻ったものだ。

ヨシこと佐藤良和も意外な出世をした。気が弱くて、常に胃腸の調子が悪そうな顔をしているヨシが高校の教頭になったのだ。学生にいじめられるのではないかと心配しているのだが、今のところ相談はされていない。

見た目ですでに得をしているのは、不動産屋を営んでいる大田 吾朗だろう。

丸く血色のいい顔に柔和な瞳、落ち着いた低い声、やや太めの体は丸くて愛らしさを醸し出している。恵比寿様のように景気の良い笑顔をすることが出来るのは商売をする上で、大いに役に立っているに違いない。

宴会が頂に達した時、大田がにやにや顔で切り出した。

「なあ、この屋敷にまつわる幽霊話を聞きたくないか？」

大分、酒が回っているようでいつも以上にしまりのない笑顔で大田は浮かべている。

皆、いい具合に酔っ払っていたがヨシだけは「幽霊」という言葉に、女子高生のように顔を青くして首を振った。

「大田、勘弁してくれよ。ぼくが恐がりなのは知っているだろ。幽霊と聞いただけで身震いがするよ」

「ヨシ、お前今年でもう五十五だろうが。若い女みたいな態度を取るなよ。お前の肝を鍛えるために季節外れの怪談とやらを聞こうじゃないか」

赤い顔で笑いながら、ツネがヨシの肩を力強く叩き、その度に細いヨシの体が揺れる。気の弱いヨシがツネに文句を言えるわけもなく、諦めたようにため息をついて大田に頷いてみせた。

最初から異論のない滋野は酒をちびちび飲みながら、話が始まるのを待っている。

全員が自分を見ていることに満足したように大田が頷き、口を開く。

「昔もむかし、素行が悪く乱暴者の男がいた。男は女にだらしがなく、ついに名家の子息としてはまずい女性問題を起こしてしまった。一族は問題のほとぼりが冷めるまで、男を田舎に隠居させることにしてね。見渡す限り田んぼしかないこの家が選ばれたってわけだ。高貴な身分である男は田舎暮らしの寂しさを女に求めて、奉公に来ていた若い娘を誑かした」

若い娘を誑かす、という部分に滋野はひっかかりを覚えた。知らずに拳に力が入っているのを、血管が浮き出ていることで気がついた。

全てを忘れて、学生時代に戻ったつもりで過ごそうと考えていたが、そう簡単には現実の問題を忘れることは出来ないようだ。滋野は内心で忌々しい、と舌打ちをした。

「女は純真無垢な若い娘で、女遊びに慣れた男からすれば扱いやすい相手だった。好きなように娘をもて遊んでいたが、ある日娘が妊娠してしまう。男を本気で愛していた娘は大層喜んで、男に妊娠したことを、晩酌しながら嬉々として囁く。大酒のみだった男は酔った勢いもあって、田舎で見つけた遊び相手の女の赤子などいらぬ、とまだ若い娘を斬り殺してしまう」

大田が刀を打ち下ろす真似をする。斬り捨て御免というよりは、トドの体操のように見えた。

「男は娘の死体を吊うこともせず池に捨ててしまうんだ。
この話の恐ろしいところはここからでね。それから、毎晩のように女のすすり泣く声ができるようになるんだ。」

『主や、主。寂しゅうございます』と、毎回決まった恨みの言葉を吐いてすすり泣くものだから、次第に男の神経は参っていった。追い詰められた男が、坊さんでも呼んで来て退治させようかと思いついて悩んでいた時に娘が『赤子が生まれました。一度だけでも抱いてやってくださいませ』と囁いた。男は慌てて庭に下りて『お前の子などいらぬ！化け物の子どもなど絶対に抱いたりするものか』と、娘が死んでも赤子の存在を否定した。怒り狂った娘は池の中から化け物となって現れて、男を喰い殺したそう。娘に全てを喰い尽くされたのか男の死体が上がることはなく、池は埋められて今は庭の何処にあったか知るものはないという」

話の終わりを小声で話して、大田は怪談の恐ろしさを盛り上げようとしたみたいだが、青ざめているのはヨシだけである。

「女の執念は恐いってことか。しかし、男を喰らうってのは、まるで鈴虫みたいだな」

周囲一帯から鈴虫の軽やかな声が聞こえてくる中で、ツネの言った言葉は半分冗談にならなかった。男しか集まっていない席では、まるで自分たちがメスの鈴虫に家を包囲されているような気持ちになる。

恐ろしい妄想がヨシも浮かんだのか、慌てたように別の話を切りだした。

「男は嫌がったみたいだけど、赤ん坊というのは可愛いもんだよ。ぼくの娘が産んだばかりなんだけど、顔が丸くてあつたかくて、指が小さくて。紅葉みたいな手っていうけどあれは本当だよ。小さな手をこっちに伸ばして笑ってくれるのが可愛くてさ」

ヨシは赤ん坊を抱えた真似をして、あやす素振りをしてみせた。

「こうやって抱えて呼びかけてやったり、あやしてやったりすると、喜ぶんだよ。ぼくはもうすっかり孫馬鹿になって家族から「じいじ」なんて呼ばれるんだよ。確かにじいさんだけど、ぼくはまだ五十代なんだぜ」

拗ねた顔をしているが、ヨシが内心まんざらではないことは、話しぶりから分かる。

嬉しそうな顔で赤ん坊をあやすヨシの仕草は、理想的な祖父の姿をしている、少なくとも滋野にはそう見えた。

「ヨシがじいさんか。面白いなあ、僕も孫が出来たらじいさんって呼ばれるんだろうなあ。今から貫禄つけとかないと」

顔をつるりと一撫でしてから大田は嬉しそうに、赤ん坊を抱く真似をした。ヨシの動きに比べると、とても同じ生き物を抱えている動きには見えない。大田が赤ん坊を抱くためには練習が必要そうだ。

「大田は十分貫禄があるだろう。ぷくぷく丸くなってよ、お前そろそろ健康診断に引っかかるんじゃないか。俺は毎年、余裕でクリアしているけどな」

ツネは豪快に笑い飛ばし、滋野も思わずつられて笑った。

すっかり全員が出来上がった頃、時計の針は一時を回っていた。各々が適当な言葉を口走りながら、床についた。

ヨシとツネが庭に面した部屋を、廊下を挟んで向こう側にある部屋を大田と滋野は適当に選んで寝床にした。

酒が回った滋野は、現実の苦しい問題をコロリと忘れて眠りに落ちることが出来た。娘の妊娠を知ってからは、ろくに眠れない日々が続いていたので寝不足だったのである。夢も見ずに朝まで直行だろうと、眠りと現実の狭間で滋野は満足げに口元を緩めた。

ぴちよ、ぴちよ、ぴちよ。

濡れた雑巾を叩くような音がして、滋野は目を覚ました。

(何の音だ?)

酔っぱらった誰かが寝ぼけて何かしているのかもしれない。夢の余韻を頭から振り払って、滋野は障子を開けて廊下に出た。

ぴちよ、ぴちよ、ぴちよ。

音が近づいてくる。暗闇の中で何かが動いた。眼をこらして正体を見極めようとする、足元を真っ白な虫が奇妙な音と共に走り去っていった。

思わず、滋野はのけぞって道をあけた。虫が走っていった後は、僅かに濡れている。

(私は寝ぼけているに違いない。年甲斐もなく酒を飲んではいやいだせいで変なものを見た気になっているんだ)

そう自分に言い聞かせると、滋野は丸まって眠った。

翌朝、障子から差し込む朝日で滋野は目を覚ました。障子を開け放って、朝の清々しい空気を吸い込む。田舎ならではの綺麗な空気が肺に満ちてくる感覚が心地よい。

昨夜集まった部屋に顔を出すと、既に大田が起き出してきており、朝食の準備をしていた。まめな男で、妻の代わりにちよくちよく台所に立つという。

料理の腕前もなかなかのもので、焼き魚と豆腐の味噌汁、ほうれん草のおひたし、白いご飯が膳に並んでいる。五十代の男性の理想的な朝食内容である。

「おお、家にいるよりも良い待遇だ。大田の気遣いがうちの女房にもありゃいいんだけどな」

ぼさぼさの頭を掻きつつ、寝巻きのままツネは腰を下ろした。

「あれ、ヨシは？まだ寝ているのかな」

すっかり旅館の女将みたいに立ち働いている大田が首を傾げる。

「夕べはしこたま飲んだからなあ。少し寝かしといてやろうぜ」

兄貴肌の発言をして、ツネはさっさと朝食に手をつけた。滋野も大田もツネと同じ意見だったので、先に朝食をいただくことにした。

「上手いよ、大田。お前こんなに上手い飯作ったら、嫁さんに叱られるんじゃないか？」

「ははは、大丈夫だよ。自分の分しか作らないからね」

どっと笑い声を一緒にあげた滋野だったが、心中では妻のことを思い出してチクリと胸が痛んだ。

今も、母子揃ってめそめそと泣きながら、これからのことを憂いているのだろうか。自分が楽しく過ごしている分だけ、後ろめたさが重たく背中に押し掛かる。

「しかし、ヨシの奴遅いなあ。年を取って酒に弱くなったか」

朝食を食べ終わり、食後の一服をしながらツネが呟いた。

「いい加減、じいさんを起こしてやるか」

暗く沈み始めた心を忘れようと、わざと滋野は軽口を叩く。ツネと大田が、にやにやと笑って賛同する顔を見ると学生時代にやった悪さを思い出した。

滋野は廊下を裸足でべたべた歩きながら、教師に悪戯をしたり、夜の繁華街へ赴いてみたり、他校生と喧嘩をしたり、色々若さに任せて悪さをしたなあと思い返していた。

いつも足の遅いヨシが逃げ遅れるので、結局全員捕まって起こられたものだ。

(もしかしたら、私はそんなに成長していないのかもしれないな)

短気なのはこの年になっても直らなかった。友人たちは頑固だとも言う。

娘も自分を頑固だと言って泣いていたことを思い出し、急に苦々しい気分になった滋野は奥歯を噛み締めた。私にどうしろというんだ、苛立ちだけが体の中で渦巻いて行き場所を失くしている。

滋野は気持ちを切り替えようと、勢いよくヨシが居る部屋の障子を開けた。

部屋には誰もいなかった。布団に寝た形跡はあるし、荷物もあるのだが肝心のヨシの姿が見当たらない。

「ヨシがない？便所も見たのかい？」

半信半疑の体だった大田も屋敷中を見回ってようやく滋野の言葉を信じた。

「あいつ、孫が恋しくなって帰ったのかもな。もしくは孫が急病だとか」

まるで事態を重く見ていないらしく、ツネは笑って軽口を叩く。その様子に滋野と大田も大変な事態ではないかもしれないと思い始めた。

子どもがいなくなったというならともかく、いなくなったのは五十代の大人なのだ。いちいち騒ぎたてるのは大げさかもしれない。

「散歩にでも行っているのかもしれないし、私たちはのんびり過ごそうか」

結局、滋野の提案に従って三人は思い思いに休日を楽しむことに決めた。

中年男が好きなように過ごす空間は何の気兼ねもいらず、久しぶりに滋野は心からくつろいでいた。ここ数週間の嵐のような日々が嘘のように、自分を取り巻く空気が優しく凪いで居る。いかに自分が疲弊していたのかを感じさせられる。

(もっとここでのんびりしていたいもんだな)

今日を含めて二日しか居られないことがひどく残念になって、滋野はため息をついた。

家に帰れば、ぎすぎすした険悪な雰囲気がかたくなに滋野を責め苛む。娘の泣きはらした顔も、妻の心労でやつれた顔も見たくはない。

夜になってもヨシは戻ってこなかった。

さすがに楽天家のツネも顔をしかめてヨシの荷物を確かめ始めた。

「乗ってきた軽自動車はちゃんとあったし、荷物の中に財布も携帯も入っているぞ。自宅に帰ったわけではないみたいだな」

「散歩にしても長すぎるし、ヨシの奴どこに行ったんだ？」

滋野は長年刑事として勤めてきたが、いざ身近な友人がいきなり姿を消したとなると平常心など吹き飛んでしまった。落ち着きなく、部屋の中をぐるぐる回る。

「ここは本当に田舎だから、車でなくちゃどこにも行けないはずなんだけどなあ」

ではヨシはどこへ行ってしまったのか？

滋野は頭を掻いて、部屋を見回した。布団は敷きっぱなしで荷物が部屋の隅に置いてある。どう考えても自宅に戻ろうとした形跡はない。

「でも荷物があるんだから、ヨシはこの家に戻ってくるはずだよね。万が一、道に迷っていたとしても近くに民家はないから、遠くからでもこの家の明かりは見えるはずだろう。いい大人なんだから、すぐ帰ってくるさ」

場の沈んだ空気を取っ払うように大田が明るい声を上げた。

「とにかく今夜は探さずにこのままヨシの帰りを待とう。もしも、明日の朝になっても戻らなかったら、全員で探しに出よう」

滋野は口に出しながらも、ヨシが今夜の内に戻ってきてくれることを期待した。

「そうだな。俺たちも今夜は大人しく寝るか。ヨシの奴、酔っ払って外を出歩いて、迷子になったのかもしれん」

がはは、と笑うツネの声が少しだけ硬くわざとらしかったのは彼自身、滋野と同じようにヨシを心配しているのだろう。大田は丸い顔に隠すこともなく、不安な表情を浮かべている。

楽しい旅行になるはずが、雲行きが怪しくなり、滋野は再び押し掛かるような不安を体を感じた。

その日の晩は皆、口数も少なく、さっさと布団へ入った。

誰もがヨシの帰宅を待っていたが、一向に彼が帰ってくる気配はない。

気弱で人との和を大切にするヨシが黙っていなくなるなど有り得ないことを、学生時代かの付き合いである三人は重々承知している。

(明日の朝になったら徹底的に探そう)

体格が小さく運動神経が鈍いヨシのことだから、本当に酔って徘徊している内に転んだりして動けなくなっているのかもしれない。

色んな考えを巡らせているうちに、滋野はゆっくりと眠りに落ちていった。

滋野が心と眼を覚ますと、強烈な違和感を覚えた。

見知らぬ男が自分が寝ていた場所に横たわっており、滋野は宙に浮いているらしく男を真下に見下ろす体勢になっている。

眼の下に隈を作り、頬をこけさせた男の顔に滋野はただならぬ気配を感じて息をのんだ。

近づいて見なくても、男の精神が限界近くまで追い詰められていることが伝わってくる。

「主や主」

女の声がするや否や、男はひっと叫んで日本刀を抜いた。手が小刻みに震えている。

「主、あなた様の子を授かりました。どうか一度だけでも抱いてやってくださいませ」

濡れたようにじっとりとした声が耳元を這いずるようにして、障子の向こうから響いてくる。五十何年生きてきたが、こんなに恐ろしい声は聞いたことがなかった。

得体の知れない何かが障子の向こうに居る、怪しい空気が息苦しいほどに部屋に充満していく。

「伊織、貴様に用はない！俺の前から失せろ！赤子などいらぬ！」

震えながら男が絶叫すると、障子の向こうから絹を裂くような悲鳴がした。

「赤子に食べ物をお恵んでくださいませ、どうかどうか、この子にお慈悲を」

すすり泣く伊織の声が甲高くなり、感覚のない耳を滋野は咄嗟に押さえる。

「化け物の赤子が飯を食うものか！赤子ともども今すぐ消えてしまえ！」

急にしんと静まり返った。すすり泣く声が消え、拍子抜けしたのか男は日本刀を床に置いた。

「この子を育てるのが私の務めでございます」

今までの哀れな声から一変して地獄の底から響くような、冷たくも重々しい声があったと思った瞬間、突風が吹いて障子が壊れた。

朱色の着物を着た女が髪を振り乱して、庭の池の上に浮かんでいる。女の腕には白い生き物が抱えられているが、人の形をしておらず、触覚のようなものが見えた。

「赤子に食べ物をくださいませ」

女――伊織が突き出したのは、真っ白な鈴虫だった。長くて白い触角を揺らし、左右の歯や口ひげを興奮しているのか、ビクビクと震わせている。

通常の鈴虫よりも遥かに大きく、丁度人間の赤ん坊ぐらいの大きさがある。

あまりにもおぞましい生き物を見せられ、男は情けないほどに震えて後ずさりした。

「やめろ、そんな化け物を俺に見せるな！お前もその気持ち悪い生き物も化け物だ！化け物は消えろっ！消えろおっ！消えろおおお！」

上擦った声で何度も同じ言葉を叫び、男は気が狂ったように両手を振りまわして喚きたてる。

正直、滋野も男同様、叫び声を上げて喚きたいほどに恐くて堪らない。今すぐにでも全力で逃げたかったが、夢だと思っただけでも目が覚めないのだ。

「赤子に食べ物を与えてやるのが、母の務め」

伊織の首が壊れた人形みたいに、かくっと横に倒れた。人間の動きではない。

「食べ物をくださいませ」

伊織の体から赤黒い腕が伸びて、喚きたてる男を捕らえた。皮を剥がされた人間の腕のように、筋肉がむきだしになっている。筋肉がびくり、びくりと伸縮するのがよく見えた。

大きな腕に捕まった男は口を塞がれたようで、くぐもった声を上げている。

「赤子と主と一緒にこの池に住むことが、私の幸せでございます」

そう言い放つと、赤黒い腕は一気に池まで男の体を引きずった。女の腕にいる虫がじたばたと騒ぐ。

「お腹が空いたでしょう、私の可愛い、可愛い子」

白い鈴虫の口が開き、左右にある鋭く頑丈な歯が男の顔をくわえこみ、顎の力で引きちぎった。庭の池が真っ赤な色に染まる。

最初に顔を喰われた男はもう、悲鳴を上げることもなく白い鈴虫に食べられていく。

首がもげ、四肢をばらされて食い散らかされていく男の惨状に滋野は吐き気を覚えて口を押さえた。

もしこの惨状を生身で見えていたら、滋野は胃が痙攣するまで吐くだろう。まともな感覚のある人間なら、こんな凄惨な場面を見せられたら気を失うに決まっている。

ぐちょり、べちゃり、ぼきり、ぼちょり。

白い鈴虫が男を喰う音がする。夢なら今すぐ覚めてくれ、と滋野は願った。悪夢から早く解放されたくて、滋野は頭を抱えた。

(目覚めろ、目覚めろ、目を覚ますんだ！)

祈るように願っていると、ふと音が止んでいることに気がついた。考えたくもないが、食べ終わったのだろうか。

目を開けて様子を窺おうとすると、伊織の瞳が宙に浮かぶ自分を見ていた。

「赤子に食べ物を恵んでくださいませ」

伊織がゆらりと滋野の方に足を向けると、白い鈴虫も喰いかけの死体から体を起こした。触角も口ひげも赤く濡れ、血が滴っている。

(殺される！目を覚まさないで！はやく、早く！)

鈴虫がにじり寄ってくる。宙に浮かぶ滋野は手足を必死に動かすが逃げる事が出来ない。

殺される、滋野は目をつぶって次に襲ってくるだろう痛みを耐えようとした。

「やめろ、やめてくれ！」

池の水面をばしゃ、ばしゃと叩きながら誰かが叫んだ。

(今の声はヨシ？なんでヨシの声が)

目を大きく開けて滋野はヨシの姿を地獄と化した庭から探そうとしたが、女と鈴虫が邪魔で池の様子がよく見えない。

(ヨシ！ヨシ！返事をしろ！)

夢の中という認識を捨てて、滋野は必死に呼びかける。

「私と共に赤子を育ててくださいませ、愛しい私の主」

甘い声音で伊織が池を振りかえって囁く。声がどんどん遠のいてく。

(ヨシ、ヨシ！)

何度も呼びかけてみるが、もうヨシの声が聞こえることはなかった。

ぼおーん、ぼおーん。

ヨシ！

寝言で名前を呼んで、滋野は目を覚ました。だるい四肢に無理に力を入れて体を起こすと、辺りはまだ暗闇に包まれている。

おかしな夢を見たせいで、夜中に目を覚ましてしまったらしい。

(ヨシが行方不明になったから、不安であんな夢を見たのか？しかし、まるで大田から聞いた怪談のような夢だったな)

夢の余韻を振り払いたくて、肺の空気を全て吐き出すような大きなため息をついた。

こんな夢を見たのは、娘のことを思い出すからだろうか。ろくでもない男に騙されて、子どもが出来たと知るとあっさり捨てられた。哀れな女。怪談の中の女は、赤子もろとも命まで奪われてしまうのだ。

腕組みをして、滋野は娘の顔を思い出す。小さい頃の無邪気に笑う顔が脳裏をよぎってやりきれない気持ちになる。

(私が頬を叩いてから、よく泣くようになったんだよなあ)

自己嫌悪の波が押し寄せてきて、滋野は布団にうつぶせになった。

いい年をして夜中にいじけている姿はみっともないが、自宅ではないからいいだろう。滋野は枕に顔を埋めた。

ぴちょ、ぴちょ、ぴちょ。

滋野は飛び起きて、障子の方へ目を向けた。昨晚も聞いた音が、廊下から聞こえてくる。

(まさか、昨晚と同じ虫が？)

ぴちょ、ぴちょ、ぴちょ。

勇気を出して障子を開けると、暗闇で何かが蠢いている。

闇の中から真っ白な鈴虫が現れ、滋野は小さな悲鳴を零した。夢の中で男を喰い散らかした鈴虫も真っ白だった。咄嗟に鈴虫めがけて手を打ち下ろしたが、鈴虫は軽やかに滋野の手を避けて廊下の暗がりへ消えた。

滋野は立ち上がって、鈴虫の後を追った。放置しておいたら、誰かが喰われるのではないかという焦りが恐怖と相殺した。廊下を走って鈴虫が走っていった経路を辿ったが、もう鈴虫の姿は見当たらず、たどり着いた先は便所だった。

念のため、便所の戸をあけてみたが何も無い。

(私は寝ぼけているのだろうか)

どこにも鈴虫の姿が見えないために、滋野は自分の目を疑い始めた。

(昨夜は酔っていたし、今夜は目覚めてすぐだったしなあ)

娘のことを真剣に悩むあまりに、おかしい夢を見たせいだろうか。裸足で廊下を歩きながら、滋野は首を何度も傾げた。

朝日の眩しさに滋野は目を覚ました。

昨晩は色々あったせいで、なかなか寝付くことができなかったために目覚めも快調とはいかなかった。妙なだるさが体にあって、しばらく布団の中でごろごろとした。

(ヨシ、戻ってきただろうか)

段々と目覚めてきた頭にヨシのことが浮かび、急いで滋野は起き上がって部屋を出た。

大田が相変わらず豪華な朝食を作って滋野を待っていたが、表情が暗い。

「マサ、駄目だ。ヨシはやっぱり帰ってきていないんだ」

朝一番で部屋を見に行ったらしく、大田は太い首を緩慢に振った。

「今日は、皆で手分けしてヨシを探しに行こう。どこかで迷っているのかもしれない」

「そうだね。ここら辺は田んぼばかりで、道がどこも似ているように見えるし、酔って家を出たなら余計に道が分からなくなるよな」

自分に言い聞かせるように話す大田の顔には、隠しようの無い怯えがある。

(大田が怯えている?)

不思議に思ったが、直接聞くのは躊躇われて滋野は黙って腰を下ろした。

「ツネの奴、起きて来ないな」

妙に静まり返った部屋の中で、普段うるさいほどに話す男の姿がないことに滋野は違和感を覚えて呟いた。

「まさか」

弾かれたように大田が立ち上がり、あっという間に廊下の向こうへと走っていく。慌てて滋野は後を追う。

障子を開けてみると、ツネの姿はなかった。

ヨシに続き、ツネまで姿を消した。

大田と滋野は広い部屋の中で、膝をつき合わせて悩んでいた。

「ツネは早起きして、ヨシを探しに行ったのかな？」

「もし探しに行くなら、私たちに何か一言あるだろう。書置きを残すぐらいは最低限したはずだ」

ヨシがいなくなって、神経質になっている時にフラリと気紛れで姿を消すほどツネは空気が読めない奴ではない。

だが、そう考えるとツネは自分の意志で消えたわけではなくなってしまう。

「ヨシに続いてツネまで消えるなんて。僕が軽い気持ちでこんな屋敷に連れてきたから」

ほとんど独り言のような音量だったが、静まり返っている部屋の中ではよく聞こえた。

「大田、どういう意味だ？」

丸い顔についている丸い瞳がきょどきょどと落ち着き泣く周囲を見ていたが、やがて諦めたのか、大きなため息をついた。

「最初の晩に怪談話をしただろ。僕だって信じてなかったけど、実はこの屋敷は祖父の代から貸してない。理由を聞いたら、手放すにしても荒れ家になったら祟られそうで恐いってじいちゃんが言ったんだ。でも、じいちゃんは痴呆が始まっていたからまともには受けとらなかったよ」

「親父さんは何て言っていたんだ」

「あの家は・・・・・・誰にも貸すなって言われた」

お互いの呼吸の音が聞こえるぐらいに部屋は静まり返り、冷えた空気が体を包んでいく。

「伊織の祟りなんて、面白半分に子どもを恐がらす作り話だと思っていたんだ。この家を貸さないのは、ただ単に不便な土地だから借り手が居ないだけなんだと思っていた」

大田は頭をぐしゃぐしゃと掻き毟る。

「伊織？怪談に出てきた女か」

夢の中で、殺された男が女の幽霊を呼んだ名前だ。滋野の言葉に大田は目を丸くした。

「あれ？僕、名前まで話したっけ？名前を口にしたら、本当に化けて出そうと思ったから黙っていたはずなんだけど」

「もう化けて出たよ。この二日、私の夢の中にね」

滋野は苦い顔をしたが、大田はさらに苦々しい顔つきになった。

「マサもか？僕も伊織が奉公先の主人に復讐する夢を見て……だから、本当に崇りがあるのかと考えていたんだ。でも、僕たちは伊織に崇られるようなことはしてないはずだよ、こんなの八つ当たりだ」

弱りきった顔をして、大田は畳を叩いた。相当に悪夢がこたえているらしい。

「大田、私は心当たりがあるし、そもそも幽霊ってやつは無差別に生きている人間に害を及ぼすものだろう。でなきゃ、こんなに怖がられたりしないさ」

「心当たりって？伊織の墓でも蹴飛ばしたのか？」

「伊織の墓はないって話じゃないか。違うよ、私は娘に子どもを墮胎させろ、と言ったんだ。伊織からすれば、私は自分を殺した男と同じ赤子を見捨てようとしている人でなしだ」

「マサ、そんな。自分を責めるなよ、お前らしくない！頑固なくせに、やけに素直な反省なんかしないでくれ。心細くなるよ」

神妙な口調になった滋野を励ますように、大田は軽口を叩いた。

だが、滋野は黙ったままで二人の間を耐え難いほどに重苦しい沈黙がおりる。

「伊織の死体は庭に埋められたんだよな」

滋野の低い呟きが沈黙を破った。

「そういう話になっているね」

「崇りならもう受けているんだし、掘り返してみるか。このままじっとしていたら、私もお前も食べられて終わりだ」

「おい、本気か？余計に怒りを買うことになるんじゃないか」

「黙っているわけにもいかないだろう。こっちはヨシとツネを連れて行かれたんだ。せめて何かやり返さないと気がすまん」

絶句して大田は滋野の顔をまじまじと見つめた。

「短気だ、短気だとは思っていたけど、まさか幽霊相手に怒るほどだとは思わなかったよ」

「ほっとけ。私は庭を掘るぞ。祟るなら真っ先に私を祟ればいいんだ」

自分の行いのせいで、友人たちが幽霊に連れて行かれたならこれ以上に腹ただしいことはない。赤子を殺せ、と言ったのは自分なのだ。罰を受けるのは自分のはずだ。ヨシは孫娘を溺愛しているし、ツネだって家族を大切にしている。

(家族を、赤子を、大切にしていないのは私だけだ。悪いのは私だ)

小屋にあった年代物のスコップを持って、滋野は庭に降りた。夢では、庭にある松の木の近くに池があった。

松の木は、夢と同じ場所にあった。

(私や大田が見た夢は、本当にあった出来事なのか……？遠い昔にここで、伊織は殺されて化け物になってしまったのだろうか)

哀れな女だとは思いうし、同情もするが、無差別に人を襲っていい理由にはならない。

滋野はスコップを地面に突き刺した。大田がそれに習って同じように地面にスコップを突き刺すと、優しい口調でそっと囁いた。

「マサはまだ間に合うよ。まだ誰も傷つけてないんだからさ」

間に合う？ 大田の言葉が滋野の胸に静かに沈んでいく。

(私は間に合うのか？まだ娘は子どもを墮胎していないはずだ。家に帰って、娘に会って私が……)

考えるのを止めて、滋野は穴を掘ることに集中した。

だが、穴を掘り始めて数時間が経っても、土の中からは何も出てこない。

土だらけになった大田と滋野は、とりあえず休憩することにして縁側に腰掛けた。

「幽霊が出たっていうのに、僕たちは随分と平常心でいるよね。これが年を取ったってことなのかな」

「五十にもなって幽霊が怖いなんて言っているのか。幽霊だろうと、凶悪犯だろうと、悪いことすれば私は捕まえて説教するだけだ」

「ははあ、きっと恐くないのはマサがいるからだ。マサは本当に怖いもの知らずだからさ、学生時代も腕っ節の強い不良相手にも平気で注意してよく喧嘩していたよね」

「ううん、あれはツネが喧嘩を売るから仕方なく私も応戦していただけだ。ツネの奴、私を散々短気だとか言っていたけど、あいつこそ短気だよ。よくまあ、今まともな職業に就いているもんだ」

学生時代、いつもツネはどこかしらに怪我をしていた。体格が大きい上に口が悪いときたものだから、よく喧嘩をして教師に叱られていた。ヨシはそんなツネを止める役目をしていた。

昔なら、ツネが喧嘩していると聞けばすぐに加勢しに行ったものだ。滋野は立ち上がって、腰を叩くと力強くスコップを握った。

(ツネ、ヨシ、今たすけてやるからな)

重労働のせいで、体の節々が痛むが滋野は力いっぱい土を掘り始めた。

庭に掘り始めた穴は一メートルを越え、大田と滋野が並んで立てるほどの大きさになった。作業に没頭していた二人は気がつかなかったが、すでに日が暮れようとしている。

濃さを増していく影に不吉な予感がして、滋野はぶるりっと体を震わせた。

「日暮れか。そろそろ幽霊の時間だね」

「出るなら出るだ。とっ捕まえて、ツネとヨシの居所を吐かせてやる」

強がりをして、滋野は土を蹴飛ばした。

それからまた数時間、日が暮れて完全に真っ暗になっても二人は穴を掘り続けたが、一向に何も出てこない。

「骨すら出てこないのか」

さすがに気力が尽き果てて、滋野は弱音を吐いて土の上にしゃがみこんだ。

すると、月光に反射して何かが足元で光った。急いで手を伸ばしてみると、男物の腕時計が埋まっている。

「腕時計だ！しかもまだ新しいぞ！」

興奮して滋野は腕時計を拾い上げた。大田も急いで腕時計を覗き込む。

土を払ってやると、腕時計はどこも錆びておらず、とても地中にあった代物だとは思えない。

「この腕時計の日付を見てよ、マサ！」

悲鳴のような大田の声に慌てて表示を見ると日付が昨日のままになっている。

「壊れているのか？」

横についているねじを回して調整しようとしたが、ねじはどんなに力を入れても回らない。大田と交代して、ねじを回そうとしたが最初から動かない仕組みのようにまるで動かなかった。

「昨日の日付か。これはツネの時計か？」

「どうだろう、注意して見てなかったからなあ」

頭をつき合わせて悩んでいたが、暗い場所ではどうにもよく見えない。

「一旦、屋敷に戻って明るい場所で確かめよう」

穴から這い出ると、二人は土だらけのまま屋敷に入った。明るい部屋で確かめると、時計の時刻は二時丁度で、秒針が停止していた。傷などは時計のどこにもなく、状態がとても良い。

「何でこんなに綺麗な形のまま、時計が埋まっていたんだ？」

二時で止まっている時計を見つめながら、滋野の中に何かひっかかるものがある。

(二時？何だ、この胸騒ぎは)

ぼおーん、ぼおーん。

柱時計の音が響いて、滋野と大田は驚いて腰を上げた。

ぴちよ、ぴちよ、ぴちよ。

異様な音がして、滋野は血の気がずっと体から引いていくのが分かった。

障子の向こう側から音がどんどん近づいてくる。思わず、後ずさりしながらも滋野は傍らに置いていたスコップを握った。

ぴちよ、ぴちよ、ぴちよ、ぴちよ、ぴちよ、ぴちよ、ぴちよ、ぴちよ、ぴちよ。

音がぴたりと止んだ。二人は息を殺して、障子の向こう側の様子をうかがうが何の変化も起こらない。

ぴちより、ぴちより、ぴちより。

異様な音に気がついて、滋野が目をやると白い鈴虫が障子紙を食べて中に入ろうとしている。

「大田、出たぞ！」

ひっと短い悲鳴を上げて大田がのけぞった。スコップを振り上げて鈴虫を潰そうとしたが、障子が歪んでいることに気がついて滋野は足を止めた。

(歪んでいる？違う、これは！)

障子が倒れて、大量の白い鈴虫が部屋に流れ込んできた。

「うわああ！」

数匹の鈴虫が服について、滋野は必死になって振り落とす。スコップで大群をなぎ払おうと大田が走ってきたが、急に動きを止めた。

顔面蒼白になり、せわしない息遣いをしながら滋野の方をゆっくりと見た。

「マサ・・・・・・・・あれ」

聞き取りづらいほどに震えた声に促されるまま、滋野はゆっくりと正面を見た。

庭には大きな石で縁取られた池が松のすぐ下にあり、滋野たちが苦勞して掘った穴はどこにも見当たらない。

この世のものとは思えないほどに深い闇に、不気味な赤い光が揺れている。光は点滅を繰り返しながら、次第に人の形に変わっていく。

髪を振り乱し、赤い着物を着た女が池の上に浮いている。腕の中には、人間の赤ん坊と同じ大きさの白い鈴虫を抱いていた。三対六本の足がばらばらに蠢いている様が、さらにおぞましい印象を与える。女の顔は髪に隠れて見えないが、すすり泣く声がする。

「あ、あれが伊織か」

滋野はじりじりと後ずさりをした。強気な発言をしていたものの、いざ目の前に現れると恐怖だけが次から次へと湧いてくる。今にも悲鳴を上げて逃げてしまいたいほどに、相手は禍々しく危険な雰囲気醸し出していた。下手に近づいたら、頭からがぶりと丸呑みされかねない。

完全に二人は怖気ついて部屋の一番端にまで下がっていた。ツネとヨシの居場所を聞き出すどころか、このままでは自分たちも同じ運命を辿ることになる。本能が二人にそう告げているが、もう逃げることも出来ない。

水面を激しく叩く音がして、滋野と大田は池を見た。行方不明になっていたツネが池の端で、手をばたつかせている。

「ツネ！」

ツネの後ろには大量の白い鈴虫が迫っていた。

「待ってろ、ツネ！今いく！」

滋野はスコップを振り下ろして、足元の鈴虫を潰して庭へ飛び降りた。

庭は白い鈴虫だらけで、裸足で降りた滋野は一瞬不快な感触に顔を歪める。足の下で柔らかいものが潰れて、どろりと気味の悪い液体を垂れ流しているのを感じた。

「おおおお！」

うと必死になって鈴虫を叩いており、表情にかなり疲れが見えた。大田が早く救出しなければ、今にも力尽きて池に沈んでしまいそうだ。

「さあ、来い！」

滋野は大きく叫んで伊織を見据えた。

(どうせ死ぬなら、人の役に立って死んでやる！)

犬死も無駄死にも御免だった。大田がツネを助けて屋敷の外に逃げる時間だけでも稼げれば、それでいい。滋野は震える足に力をいれて踏ん張る。

前二本の足を振り下ろして、伊織は滋野の逃げ道を減らし、首を鞭のようにしならせて噛み付こうと襲い掛かってきた。

「くそっ！」

スコップを顔面を守るように構え、左右の歯に挟まれることだけは避けることが出来たが、右の歯が滋野の腕に食い込む。

肉がめりめりと裂けていく感触がはっきりと伝わってくる。

「あああああ！」

自分の血が大量に吹き出るのが視界に飛び込んできて、滋野は自分の死がすぐそばまで迫ってきていることを感じた。

(くそお、くそお！私は何でこんなところで死ぬんだ？私が、私が家族に意地を張って家を出て、この屋敷に来たからか？)

脳裏に妻と娘の顔が浮かぶ。散々言い合ったままで和解しないまま永久の別れを迎えるのか、滋野の胸に絶望が広がる。

伊織の歯は容赦なく腕に喰いこみ、スコップで塞いでいる左側の歯が今にもスコップを食いちぎろうとしている。左右の歯に挟まれて、食い殺されるのはもう時間の問題のように思えた。

伊織の爛々と光る赤い目が滋野を見ている。赤い複眼には何の感情も読み取れず、もはや人間としての感情が消えてしまっている。

肉を食べようとしているのも赤子のためではなく、化け物の本能が求めているからなのではないか。

伊織は人でも女でも母親でもなくなり、夜な夜な肉を求めて彷徨う羽虫の化け物になったのだ。自分を殺した男の肉を喰らった時から、もう伊織には人としての意識など必要なくなったに違いない。

それでも赤子への想いを捨てられず鈴虫の赤子を抱いているのは、伊織の執念の深さを物語っている。

足元では小さな白い鈴虫が足を止めて伊織の攻撃に耐えている滋野に、よじ登ろうとしてきている。今すぐにでも振り払いたいが両手を動かすことが出来ず、鈴虫たちはどんどん滋野の体を覆いつくそうとよじ登ってくる。

(もう駄目だ、私は殺される……………)

腕の感覚は完全に消え失せ、スコップがひしゃげられた。伊織の左右の歯が、ゆっくりと滋野を挟もうと開いた瞬間。

「iiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiii！」

甲高い音が生きて、伊織の動きが止まった。池から助け出されたいツネがスコップで、赤子サイズの鈴虫を叩きつけている。威嚇なのか、怯えているのか、鈴虫はさかんに大音量で鳴いている。

ツネは体中から出血しているらしく、遠めからでは赤い絵の具を全身に塗りたくっているみたいにどこもかしこも赤い。それでも闘志は消えないらしく

「糞つたれの鈴虫が！誰がてめえの餌なんかになるかよ！」

若い頃のようなドスのきいた啖呵を切って、飛び掛ってきた鈴虫をスコップで殴りつけ、蹴り飛ばした。

「iiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiii！」

噛み付いていた滋野を放り投げ、伊織は鈴虫の前に庇うようにして、巨体を移動させた。ツネの目の前に立つと、前二本足を威嚇するように高々を振り上げる。

大田がひいっと悲鳴を上げたが、頭に血が上っている様子のツネはスコップを振り上げて「上等だ、化け物！人間をなめるんじゃねえぞ！」

気迫は負けていないが、やはりどう見ても分が悪い。体格差がありすぎる。

滋野は加勢しようと走り出したが、右腕が痺れたように感覚がない。血まみれの腕は肉がズタズタになり、今にも体から離れて落ちてしまいそうに見える。

(畜生！)

片方の腕だけでスコップを引きずりながら、近づこうとすると池に何かが動いている影が視界に入った。

目を凝らしてよく見ると、

「ヨシ！」

最初に行方不明になったヨシが池の中から頭だけを出している。腕の痛みを忘れて、滋野は池に走り寄った。

「ヨシ！ヨシ！」

「マサ・・・・・」

ヨシが片腕を滋野に伸ばす。ヨシはもう体に力が入らないのか、引っ張られるだけだったが滋野の怪我に気がついて自力で這い上がった。しかし、何故か片腕は池の中に入ったままだ。

「マサ、伊織を見つけたんだ」

池の中から片腕を上げると、その手には髑髏は握られていた。

「これが伊織？でも殺された男の頭蓋骨かもしれないぞ！」

「いいや、これは伊織だ。池に引きずり込まれてからずっと、この頭蓋骨がぼくに話しかけてきたんだ。主、主って僕を呼ぶんだよ！」

混乱しているのか、涙目になってヨシが叫んだ。

「ああああ！」

大田の悲鳴に弾かれたように滋野は視線を上げた。

伊織の足に掴まれてツネの体が宙に浮いていた。赤い複眼の瞳をぎらぎらと輝かせ、歯を鳴らす伊織は、今にもツネを頭から齧りつこうとしている。

滋野は決意して、片手でスコップを握りなおすと頭蓋骨めがけて打ちおろした。

ばきやりっと嫌な音を立てて、頭蓋骨に罅が入る。

もう一撃加えようとしたが、腕の痛みがひどくもう力が入らない。滋野は膝をついて鈴虫だらけの地面に倒れ落ちた。

血まみれになった滋野の腕を、大田が着ていたワイシャツを割いてツネが手当てをしてくれた。その横で、ヨシと大田は疲れ切って座り込んでいた。

伊織の体が消えると同時に眩しい光が庭に差し込んできて、庭を埋め尽くしていた鈴虫たちも一斉に消えた。

眼球が痛くなるほどに、神々しい朝日の影に四人は包まれた。

長い、長い夜が明けたのだということに気がついて全員脱力してその場に崩れ落ちた。

伊織の頭蓋骨だけが悪夢の名残りのように、まだ転がっている。

「こんなもん踏みつぶしてやる！」

全身傷だらけのツネが頭蓋骨を踏もうと足を上げたが

「やめてくれっ！」

学生時代の頃と同じ高い声でヨシが止めた。

「ヨシ？お前、何を言ってるんだ？これは俺たちを殺そうとした化け物の骨だぞ！」

「ぼくは、違うんだ。ぼくは殺されそうにはならなかったんだよ……………」

苦痛に耐えるようにヨシは目を閉じて、唇を噛みしめた。

「何があったのか話してくれ、ヨシ。私たちは何が起こったのか、今でも分からないんだよ」

極度の疲労で立ち上がる気力もなくなった滋野が話を促す。大田は黙ってヨシを見ている。

全員からの視線に耐えかねたように、ぽつり、ぽつりとヨシは話し出した。

「ぼくは便所に行こうと思って廊下に出た時に、いきなり池の中へ引きずり込まれたんだ。庭に池なんかはないはずなのに、すごく驚いたし怖かった。溺れると思ったんだけど、頭蓋骨がぶかりと目の前に浮かんで」

その時のことを思い出したのか、ヨシは遠い目つきになり空を見上げた。

「主や、主。伊織は冷たい水の中で寂しゅうございます。どうか一緒に赤子を育ててやってくださいませ……………」
頭蓋骨から、確かにそう話す声が聞こえたんだ」

割れた頭蓋骨が朝日に照らされて、痛々しいほどに哀れな姿をさらしている。

「ぼくは主なんかじゃないから焦ったよ。でもね、伊織はただ一緒に赤子を育てる人がほしいんじゃないかって声を聞いて

ていて思ったんだ。冷たい水の中で、時間が止まってしまった伊織は寂しくて、寂しくてたまらなかったから、鈴虫を赤子だと思い込んでまで孤独を和らげようとしている……ぼくにはそう感じられたんだ。だから、ぼくを池の中に閉じ込めたんじゃないかな。きっと主の代わりが欲しかったんだよ」

伊織は池から孫の赤ん坊の話を嬉しそうに話すヨシを見て、彼を引きずり込んだのだろうか。新しい主として迎え入れるために。

(殺されても尚、主を探すのか)

理解できずに、滋野は静かに首を振る。

「お前なあ、俺は食われかけたんだぞ！いきなり池の中に引きずり込まれたと思ったら、鈴虫どもが群がってきやがった！マサと大田がすぐに助けに来てくれなかったら、俺は今頃鈴虫どもの腹の中だ！」

体の至るところを噛まれて、相当に腹が立っているらしくツネは土くれを乱暴に蹴りあげた。

「ちょっと待って。すぐだって？僕たちがツネを見つけるのには、一日かかったはずだよ」

「何を言ってんだよ。俺が襲われている時にはもう二人ともいたぜ？」

大田と滋野は顔を見合わせた。ポケットに入っていた腕時計を大田は取り出して、四人の間に置いた。

時計の針は進んでおり、秒針は六時を指している。日付も進んでいた。

「これは俺の時計だな。何だよ、この日付。進んでないか？」

「本当だ。二日ぐらい進んでるね」

今度はツネとヨシが顔を見合わせた。

「ぼくが池に沈んでから、すぐにツネが池に放り込まれたように思ったけど——現実には時間差があったってことかい？」

「俺は一日だと思ったが、ヨシは二日だと思った……。もしかして、俺たちは池に引きずり込まれた時から時間が止まっていたのか？」

浦島太郎のような気持ちになったのか、ふたりは辺りの景色をじっくりと観察している。

「でも、みんな助かって良かったよ。僕はもう生きて帰れないと諦めそうになったから」

大田が頭をかいて、いつもの温和な笑顔を浮かべた。その笑顔につられるようにして皆表情を緩める。

「まあな、俺もあんな化け物に啖呵切ってよく生きているもんだと我ながら感心するね」

「ツネには、学生時代から肝を冷やされっぱなしだよ。もうこりごりだ」

滋野は文句を言って土の上に倒れこんだ。朝日の温かみが体に沁みわたっていく。

「あの、伊織の骨のことなんだけど、どこかの寺に供養してもらいたいって、ぼくは考えているんだ。駄目かな？」

おずおずとヨシが発言するとツネが露骨に嫌な顔をした。

「だから、そんな化け物に同情する理由はないっつってんだろ！俺は今すぐにでもその骨を踏みつぶしたいぐらい腹が立っているんだぞ！」

ツネの勢いにヨシは腰が引けたらしく、反論もせずに下を向いて黙りこんだ。

「供養するかどうかはまた別の問題としても、家の庭に骨があるのはうちとしても困るな」

縁起が悪くて貸せないしねえ、と大田が一人でぶつぶつ呟く。

皆の話をどこか遠くで聞きながら、滋野は朝焼けの空を見つめた。
日光が暖かくて気持ちいい、生きているということを滋野は全身で感じていた。腕が痛むのも生きている証拠だ。

男に騙され殺されて、池に捨てられた伊織は二度とこの暖かさを感じることは出来ない。

「殺さなきゃ良かったんだ」

誰にともなく滋野は囁いたが、三人が振り返った。

「最初から殺さなければ、男は死なずに済んだし、ヨシは池に閉じ込められることもなかったし、ツネが嘔まれることも、私が腕を怪我することも、大田が怯えることもなかった」

「どうした、マサ？疲れて頭が混乱しているのか？」

心配そうな顔で、大田が滋野の傍にひざまずく。

「私は殺さないよ」

「何を言っているんだ？お前、おかしくなっちゃったのか？折角、無事に生きて戻ってこられたのによ」

本気で滋野が発狂したのかと思ったらしく、ツネが滋野の体を起そうと肩を掴む。ヨシはひたすら、おろおろしているだけだ。

「赤子のことだよ。私は殺さない。鈴虫にだって母を想って泣く心がある、化け物になっても子どもを育てたいと泣く心がある。人間である娘は、どれほどまでに腹の子どもを愛しているか、私は考えるべきだったんだ」

滋野は伊織の骨を抱え上げた。

「この女がしようとしたことは許されないことだ。罪もない人を喰おうとしたんだからな。でも、私はこの女を殺した男と同じことをしようとした。同罪だよ」

傍らに座る大田の顔が悲しそうな色を浮かべ、何かを言いかけたが滋野は首を振って制止した。

「だから、せめてもの罪滅ぼしに私がこの骨を供養するよ。それでいいか？」

「マサは頑固だからな、俺が反対しても供養するって言うんだろ」

諦めたようにツネは肩をすくめてみせたので、滋野は苦笑した。

「ぼくはそうしてもらえると嬉しいよ。何だか娘のことを思い出してしまっただけでね、伊織を怖がる気持ちは当然あるんだけど、それ以上に哀れで……。ぼくの娘はきちんと子どもを産めて良かったって、複雑な気持ちなんだ。怖いけど、ぼくは伊織を憎みきれない」

「本当にヨシはお人よしだな！いつか幽霊に殺されても知らんぞ！骨なんか捨てときゃいいんだ」

「まあまあ。いいじゃない、骨を放置しておくよりもずっと人道的な処置なんだし。元々はうちが所有していた家の問題だから、僕も一緒に供養しに行くよ。責任を取らないとね」

のんびりとした大田の言葉に滋野は頬を緩めて「頼む」と頭を下げた。

「池とか水場が近くはない、あったかい場所に埋めてあげたいね」

大田なりの冗談かと思ったが、滋野は口を出さずに静かに頷いた。ヨシも頷いている。

ツネはまだ不満そうだったが、自分以外の全員が賛成しているので黙って舌打ちをしただけでもう文句を言おうとはしなかった。

「今回のことを人に話したら、俺たちは全員まとめて病院送りだろうな」

血まみれの服を引っ張りながら、ツネが低い声で呟いた。

「この腕を見せても、酒の飲みすぎで暴れて怪我をただけだと笑われるだけだろうしなあ」

ツネの言葉に賛同して、滋野は自分の腕を見た。応急処置をしてはもらったが、早く病院できちんと診てもらわなければいけないだろう。

「・・・・・・・・今回のことは長い悪夢だったってことで、早く忘れることにしたいな。覚えていても悲しくて怖くて辛いだけだろうし」

臆病者のヨシには今回のことは相当にこたえたらしく、大きなため息をついた。一回り小さくなったようにも見える。

「今度、集まって旅行する時は新築のホテルに泊まろう。怪談なんてまるで関係のない場所で、のんびり過ごそうよ」

リッチな提案をして、大田は朗らかに笑った。

「定年退職したら、そういう旅もいいな」

朝日の中で滋野は目を閉じて、久々に心から笑った。

伊織の骨は、満場一致の意見で近所にある寺に預けることにした。一応、屋敷にあった木箱に骨を収めたが、幽霊が憑いていた骨とドライブする気にはどうしてもなれなかったのだ。

いきなり、割れた頭蓋骨だけを持って現れた中年四人組を住職は大変怪しく思ったようだが、何とか骨を預かってくれることになり、四人は安堵の息を漏らした。

持って帰って欲しいなどと言われても、誰にもそんな勇氣はない。口では同情しているとは言ったものの、ヨシだってまだ伊織に怯えているのだ。他の三人はさらに怯えている。

ツネは認めたがらないだろうが。

無理を言ってお経をあげてもらい四人は簡単にだが、伊織を弔った。

これでもう化けて出ることはないだろう。

石段を下りて帰ろうとしたときに、滋野は鈴虫が鳴く声を聞いた気がした。

車から降りた四人は、各々の帰宅方向へ向かう電車に乗るために駅に降り立った。

寺へ行く前に病院に行ったので、怪我の手当ては済んでいるがツネと滋野の姿は包帯だらけで痛々しい。

「この怪我を見たら、また女房がうるせえだろうなあ。酔ってマサと相撲をとったことにするかな」

ガーゼだらけの顔をさすりながら、ツネがにやりと笑う。

「よしてくれ、私が乱暴者だと思われるだろ。大体、ツネは相撲でごまかせるかもしれないが、私なんてこの怪我だぞ。言い訳が思い浮かばん」

ツネは数こそ多かったものの全て軽傷だったが、滋野の傷は深く、腕を包帯だらけにして首からつり下げている状態である。

「相撲で白熱しすぎてツネに折られたことにしたら面白いかもね」

けらけらと、無邪気な声をあげて大田が笑う。大田の発言はいつも冗談なのか本気なのか分からないところがあるが、それもまたこの男の魅力ではある。

「でもさ、二人とも入院とかにならなくて良かったよねえ。ぼくはマサの傷を明るい場所で見るとは失神するかと思ったよ」

線の細いヨシはまだ青い顔をしている。化け物の伊織を退治した男のする顔とは思えない。

もし、ヨシが伊織の骨を壊してくれなかったら、こうしてお互いの顔を見て冗談を言い合うことなど出来なかっただろう。

学生時代からずっと守られてばかりだったヨシが、結果的には全員を助けたのだが、本人はその自覚がまるでないらしい。

感謝の言葉を言いたい気持ちもあったが、滋野は言わないほうがよからうと判断した。

礼を述べたら娘を重ね合わせて伊織に同情していたヨシが、とどめを刺したのは自分であると自覚させることになる。そうなってしまうえば、彼をひどく苦しめることになるような気がしたのだ。

「今度会う時は良い報告が出来るように頑張るよ。私なりにね」

少し照れくさい気持ちもあったが、滋野は己の胸中を素直に告げた。

大変な騒動があったせいもあるが、全員が自分に気をつかってくれていたことはよく分かっていた。

娘と逃げずに正面から向き合うことを告げて、皆に感謝の気持ちを述べる代わりにした。

「そうだな、次は因縁のないまっさらな場所で、今度こそそのんびり過ごそうぜ」

「良い場所を探しておくよ。酒飲み放題で騒ぎ放題で相撲が取れる場所をね」

「ぼくは孫の世話をたくさんしているし、役に立てることがあったらいつでも連絡してくれよ。待ってるからさ」

学生の頃に戻ったように、全員明るい笑顔で別れを告げて歩き出した。

また明日すぐ会えるかのような気楽さで。

一度だけ滋野は後ろを振り返り、ばらばらの方向へ歩いていく友人たちを見た。

とんでもなく恐ろしい目に遭った時に一緒にいたのが奴らで良かった、妙な幸福感を覚えて滋野は帰り道についた。

街は夕暮れに染まり、あちこちから夕食の香りが漂っている。

滋野は自宅の玄関先で立ち尽くしていた。

片腕を包帯だらけにして首から釣っている自分の姿を家族はどう思うだろう。

飛び出すようにして家を出て行った父親が大けがをして戻ってきたのを見れば、どこへ行ってきたのか訝るに違いない

。 上手い言い訳を思いつかないまま、ついに自宅に到着してしまった滋野は頭を掻いて途方に暮れた。

服に線香の香りが、ほのかについており静かに空気中に漂っている。

(伊織は成仏出来ただろうか。もし、白い鈴虫にも魂があったなら一緒に成仏したろうか)

おぞましい化け物に成り下がっても、主を求め、赤子を育てようとするとは女はたくましいものだな、滋野はぼんやりと現実逃避にそんなことを思う。

(生きているなら、まだ間に合う。悲しい化け物になんか成り下がらなくても、私が何とかしてやる)

滋野は勢いをつけて、玄関の扉を開けた。

終

鈴虫の骨

<http://p.booklog.jp/book/26091>

著者：森山

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/next7/profile>

表紙画像：戦場に猫〈いくさばにねこ〉様

<http://catinthedeath.web.fc2.com/index.html>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/26091>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/26091>